



オタク文化とジェンダー

著者	浅野, 智彦
雑誌名	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. II
巻	72
ページ	141-154
発行年	2021-01-29
その他の言語のタイトル	Otaku Culture and Gender
URL	http://hdl.handle.net/2309/166641

オタク文化とジェンダー

浅野 智彦*

社会学分野

(2020年8月24日受理)

要 旨

本稿は計量データによって「腐女子」の特性を検討し、それを通してオタクカルチャーとジェンダーの関係の一端を明らかにするものである。その際に、代表的な先行研究である北田暁大の知見を別の調査データによって再検討するという手順を踏む。結果として、(1)「腐女子の反『データベース消費』的態度」は間接的に支持され、(2)「腐女子の反性別規範的態度」は性役割分業については両義的な結論となるものの、恋愛至上主義への消極的態度については比較的強い支持を得た。その過程で、三つの調査間で異なる結果の出ている部分があり、それらについては今後の調査研究に期したい。

キーワード：趣味, オタク文化, やおい・BL, ジェンダー

1. 問題設定と背景

1. 1 趣味研究とジェンダー

本稿は、アニメ・マンガ・ゲームなどのいわゆるオタク文化の享受とジェンダーとの関係について計量調査のデータを用いて検討するものである。その際に、検討のための準拠枠として北田暁大の「腐女子」論を参照する(北田 2017)。北田は、練馬区において実施された若者対象の調査データから、男性オタクとは異なった「腐女子」の文化消費や性愛観を検出した。別の調査データを用いて分析した場合にもこの結論が支持されるかどうかを確認すること、これが本稿の目的である。

はじめにこの問題設定の背景について説明しておこう。

1980年代に登場した「オタク」という言葉は、今日では広く使われるようになったためその意味合いが薄められてはいるが(浅野 2019)、それでもなおその中核的なイメージはアニメ・マンガ・ゲームに結びつけられている(もちろんそこにアイドルや鉄道を加えてもよいだろう)。「腐女子」は、このようなオタク文化の中でも、男性キャラクター同士の性愛を軸にした物語を楽しむ女性たちのことを指す。そのような物語は、有名な作品の二次創作であることもあれば、オリジナルな作品であることもある(「腐女子」, 「やおい」, 「BL」, 「ボーイズ・ラブ」などの近接諸概念の歴史的な整理については溝口(2015), 堀・守編(2020)を参照されたい)。

オタクあるいは腐女子のこのような「楽しみ」は一般的にいえば「趣味 hobby」に属するものであり、特に若い人々を中心とした趣味活動として研究されてきた。それら趣味研究は、近年ジェンダーを分析上の重要な変数とみなすようになりつつある。例えば、趣味(tasteとしてのhobby)の研究の古典として参照されるブルデュエの議論は、その後、多くの社会学者によって実証的・批判的な検討を受けてきたが、その際の焦点の一

* 東京学芸大学 社会科学講座 社会学分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

つはジェンダーであった。トニー・ベネットらは、英国での大規模調査のデータを用いてブルデューの文化資本論を検討した上で次のように述べている。

「ジェンダーは文化的な嗜好と実践の組織化を構造化する重要な力であり、それは階級や年齢に還元できない。」(Bennett et al. 2010=2017: 425)

同じくブルデューの理論を土台として日本社会における文化資本の構造を計量データによって検討した片岡栄美は、ブルデューがフランスに見出したのとは異なる、日本に固有のジェンダー非対称性を明らかにした(片岡 2019a)。すなわち、文化資本は女性の場合には学歴・職業・結婚いずれの局面においてもよりよい地位の達成にとって有利な条件として働くのに対して、男性の場合には、必ずしもそのようにはなっていないのだという。片岡はまた大学生を対象とした調査の結果から、象徴闘争としてのバウンダリーワーク(自分たちの間に境界線を引く作業)のあり方をジェンダーに言及しつつ明らかにしている(片岡 2018, 2019b)。すなわち大学生たちは、自分たちを「体育会系」「オタク」「草食系」等々に分類し、他のカテゴリーの人々に対して差異化・卓越化を行っており、それらのカテゴリー選択にジェンダーによる偏りがあるだけでなく、同じカテゴリーの中でもジェンダーによる違いがある。例えば同じ「オタク」でも男性と女性とでは異なった特徴を示しており、男性はコミュニケーションのあり方、女性は音楽の嗜好と結びつけて自分たちをそれとしてカテゴリーライズしているのだという。

他方、神野由紀らは、テイストではなくホビーとしての手作り趣味に注目し、それがジェンダーによってどのように分化してきた(あるいはしている)のかを雑誌データベースを用いて明らかにした(神野・辻・飯田編 2019)。出発点においては性役割に沿った道徳規範を背景にして少女は「手芸」に、少年は「工作」へと水路付けられたものの、「間もなく、そうした目的自体が単に作る趣味を正当化するための大義名分になっていく」(神野・辻・飯田編 2019)。さらにそういった正当化の必要さえ少なくなった今日においてさえ「趣味の世界にはジェンダー的なすみ分けが根深く」持続しているのである(神野・辻・飯田編 2019)。オタクの男子と腐女子もその例外でなく、一見似ている趣味のように見えて「関心の方向が全く異なることから互いの存在を徹底して無視する関係が見られる」のだという(神野・辻・飯田編 2019)。

このようにオタク文化は趣味研究とジェンダー論の交差する重要なトピックとなっている。

1. 2 北田暁大の「腐女子」論

本稿もまたオタク文化を楽しむことと、ジェンダーとの関わり合いを経験的に検討しようとするものであるが、その際に北田暁大の「腐女子」論を検討のための枠組みとして参照する(北田 2017)。その理由は以下のようなものである。第一にそれは、腐女子と男性オタクとの違いについて計量的なデータに基づく洗練された分析を行っている数少ない研究の一つである。第二に、このデータは(いわゆるコンビニエント・サンプリングではなく)サンプルの代表性に十分に注意を払って設計された社会調査によって得られたものである。第三に、以下で見るように分析の結果として北田が引き出した結論はすぐれて啓発的であると同時に論争的なものである¹⁾。第四に、北田らの調査は練馬区の若者を対象としたものであり、そこから引き出される知見を一般的なものとして提示するためにはさらに調査を重ねて再検討する必要があると考えられる。

以上の4つの理由から、異なった調査データを用いて北田の知見を再検討することには、相応の意義があると判断した。

経験的な知見の紹介に先立って、北田の「腐女子」論の理論的な骨格を概観しておく。核となる問いは、人が物語を楽しむその楽しみ方をどう捉えるか、である。これについてよく知られているのは大塚英志の物語消費論であろう(大塚 2012)。これは小さな物語の消費を通して、それらの諸物語の背景に隠されている大きな物語(世界観)への接近を楽しむという消費の仕方である。大塚はこれを1980年代の消費社会に適合的な楽しみ方として見出した(大塚がその典型的な対象として取り上げたのはビックリマンチョコとそのおまけのシールである)。

この議論を土台としてオタクの楽しみ方が異なった位相にあると論じたのが東浩紀だ(東 2001)。東によれば、1990年代以降のオタクたちは大きな物語(世界観)を必要とせず、ちょうどデータベースから自分の好

みに合ったパーツ（いわゆる「キャラ」や「萌え属性」など）を引き出し、好きなように組み合わせ楽しんでるのだという。彼はこれを「データベース消費」と呼んだ（東がとりあげる典型的な対象は美少女ゲーム、いわゆる「ギャルゲー」である）。

このような「データベース」と「キャラ萌え」による消費は、しかし、男性オタクを中心としたものであり、女性のオタク（特にやおい・BLを愛好する女性たち）はまた異なった楽しみ方をしているのではないかと東園子は指摘する（東 2015）²⁾。東は宝塚ややおいの愛好者たちの研究を通して、彼女らがキャラそのものではなく、キャラ同士の間関係性を消費していることを明らかにし、これを「相関図消費」と呼んだ。相関図消費は、東の考えでは、女性同士のホモソーシャルティ（女性同士の友情や連帯）を表象し、また実現するための（そしてそれを楽しむための）手段となっている。

以上の経緯をふまえ、北田は東園子の議論を下敷きにしなが、腐女子の楽しみ方のうちに現代社会の性愛のあり方に対する繊細な懐疑を読み取ろうとする。すなわち「恋愛や性愛、結婚などにかかわる既存の規範に従順に従うのではなく、その意味を関係性や自己身体にかんしてシビアに問いかけつづける点にこそ、腐女子の『可能性』がある」（北田 2017：303）とする。

では練馬区の若者調査データから北田が引き出した知見とはどのようなものか。細かい点をわきにおいてデータによって支持された骨格となる命題のみ抽出するなら、以下の4つに整理できるだろう。

- (1) 腐女子の趣味対象（愛好する諸作品）に対する態度は、「データベース消費」というよりは人格陶冶型、教養主義的な受容に近い。
- (2) 腐女子における作品の中での恋愛と現実の恋愛との関係は、男性オタクにおけるそれとは異なった関係に置かれている。
- (3) 腐女子の間の絆（趣味縁）は、オタクであることよりも腐女子であることによって結ばれている点で、男性オタクのそれとは異なっている。
- (4) 腐女子は戦後家族的な性別役割規範に対してきわめて懐疑的な態度をとっており、この点において男性オタクとは対極の位置にある。

本稿では、紙幅の都合および使用できるデータの事情から、(1)と(4)に焦点を合わせる。

1. 3 使用するデータ

以下、本稿では北田らとは全く別に行った調査のデータを用いて上記の二つの命題が支持されるかどうかを検討する。それに先立って利用するデータの概要について述べておく。

まず参照枠となる北田らの調査の概要は以下のようなものである（北田 2017：18）。

調査主体：北田暁大と解体研

調査実施時期：2010年12月

調査対象：練馬区在住の1988年1月1日から1990年12月31日までに生まれた男女

回答者の抽出：練馬区の住民基本台帳より系統抽出

調査実施方法：郵送による配布回収

有効回答数：647人

回収率：32.6%

この調査は以下「北田調査」と略称する。調査全体についての情報および結果の概略は、北田・解体研（2017）の他、ネット上で公開された情報によっても知ることができる（<https://sites.google.com/site/kaken21730402/home> 2020年8月19日取得）。

他方、本稿で用いるのは以下の2種類の調査データである。

- (1) 青少年研究会2014年調査

調査主体：青少年研究会有志

調査実施時期：2014年10月～11月

調査対象：全国の16歳から29歳の男女

回答者の抽出：日本リサーチセンターのトラストパネル（調査協力者の登録データベース）を利用，2010年国勢調査に基づいて年齢・性別・地域ブロックによる割当を行った。

調査実施方法：郵送による配布回収

有効回答数：556人

回収率：39.7%

この調査は以下「青少年研調査」と略称する。調査全体についての情報および結果の概略を青少年研究会のウェブサイトにおいてみる事ができる（<http://jysg.jp/img/20191013.pdf> 2020年8月20日取得）³⁾。

(2) グローバル若者研究会2015年調査

調査主体：グローバル若者研究会

調査実施時期：2015年9月

調査対象：東京都杉並区および愛媛県松山市在住の20歳の男女

回答者の抽出：杉並区・松山市の選挙人名簿から層化し系統抽出

調査実施方法：郵送による配布回収

有効回答数：473人（杉並区259人，松山市214人）

回収率：23.6%（杉並区25.9%，松山市21.4%）

この調査は以下「GYS調査」と略称する。これは、宮台真司が1990年に実施した大学生調査（宮台1993→2007）を継続的に再検討する企画として始まり，杉並区・松山市の20歳の男女を対象にして2005年，2009年と経時的に実施されてきた調査の最新版である（2020年8月現在，次の調査を準備中）。調査全体についての情報および結果の概略は辻・大倉・野村（2017）によって知ることができる⁴⁾。

あらかじめ注意を促しておきたいのは，北田調査（2010年）と他の二つの調査（2014年，2015年）の実実施時点の違いである。溝口彰子が詳細に論じているようにやおい・BLのジャンルは歴史的に変化を遂げ，多様化してきた。それにともない言葉遣いについても時期によって違いが生じてきている。例えば「腐女子」についても溝口は次のように指摘している。

「なお，近年では，社会学者・東園子が二〇一〇年に発表した論文の脚注で述べているように，BL愛好家に限らず，広くアニメやマンガが好きなオタク女性を「腐女子」と呼ぶように用法が広がっている」（溝口2015（kindle版）：位置665）

つまり，同じ「腐女子」という言葉を用いていても，その使われ方，あるいはその用語を軸として組織される「楽しみ方」は調査時期によって（あるいは現在ではさらに）異なっているかもしれないということだ。したがって以下の分析において北田調査と青少年研調査，GYS調査との間で何らかの違いが見いだされた場合，それは調査地域や調査方法などの違いによるばかりではなく，このような対象者の側に生じた変化によるものであるかもしれないという点に注意されたい。

2. 「腐女子」とは誰のことか

2. 1 北田による操作的定義

分析に先立って「腐女子」（それと関連して男性オタクも）を操作的に定義しておく必要がある⁵⁾。北田は以下のような手順でデータから腐女子を抽出している（北田2017：269-270）。

まず「オタク尺度」を構成する。これは「好きなマンガについて友達と話をする」「アニメ趣味選択」「ゲーム趣味選択」などオタク的とみなしうる行動に関わる質問への回答を（意味的にオタク度に対応するよう必要に応じて反転した上で）標準得点化した上で加算したものだ。この得点が高いほどオタク度が高いとみなしうる。さらにこの得点を5層にピン分割して，上位2層を「オタク」，中位を「中間層」，下位2層を「非オタ

ク]とする。

次に二次創作についての質問に着目し、二次創作志向の有無を識別する。具体的には、「マンガの二次創作（同じ登場人物で、原作のストーリーとは違うストーリーを考えたり読んだりすること）に興味がある」という質問（4件法）への回答を肯定・否定の2値に割り当て直す。これによって二次創作好きとそうでないものとを識別できるようになる。

最後にオタク尺度と二次創作志向を組み合わせることで6つ、さらにそれを男女で分けて12の類型を構成する。その上で「二次創作オタク」女性すなわち「『二次創作好きで、オタク尺度が高位2層である女性』を、操作的に腐女子とし適宜『≒』の記号をもって併置する」（北田2017：307）。

このようにして抽出された二次創作オタク（≒腐女子）の構成比は、女性回答者の17.6%となる。全有効回答者数647人のうち女性は387人と報告されているので、腐女子はおおむね68人ほどになる。他方、これに対応する男性の二次創作オタク（北田論文の中では「男性二次オタク」と表記）は、構成比23.3%、実数で60人ほどとなる。

2. 2 青少年研調査における操作的定義

青少年研調査は質問項目において北田調査とは異なっており、比較を想定して設計されたものでもないのので、北田と同じように腐女子を取り出すことはできない。そのかわりに以下の質問項目を用いて腐女子を操作的に定義する。

「あなたが現在よく読むマンガのジャンルを、次の選択肢からすべて選んで○をしてください。」

この問題の選択肢の一つとして「やおい・BL」が提示されており、これに丸をつけた回答者を「腐女子」として扱う。実数でいうと39名で、すべて女性である。

この間は、マンガを読むかどうかを尋ねた上で、「読む」と回答した人にだけ尋ねられている。マンガを読まないと回答した人が41%おり、それらは上記の質問にとっては「非該当」にあたるが、それらも含めて全体としてみたときに「腐女子」の構成比は7.0%、女性の中での構成比は12.7%となる。

他方、腐女子とは別に「オタク」の操作的定義もあわせて行っておこう。青少年研調査では趣味を複数選択方式で尋ねており、27個の選択肢の中にはアニメ、マンガ、ゲーム（据置機・携帯機・PC）が含まれている。そこで、これら三つのうちどれか一つに丸をつけた回答者を広義のオタク（いわばライトオタク）とする。他方、それら三つの全てに丸をつけた回答者を狭義のオタク（いわばヘヴィーオタク）とする。あとで腐女子と比較することになる男性オタクについて構成比を見てみると、広義のオタク男性は全回答者の33.1%、男性回答者の74%、狭義のオタク男性は全回答者の12.45%、男性回答者の28.0%となる。

女性についてもみておこう。広義のオタク女性の構成比は、全回答者の30.7%、女性の55.6%、狭義のオタク女性の構成比は、全回答者の11.0%、女性の19.9%となる。腐女子との関係でいうと、広義のオタクは腐女子を包摂する関係にあるが、狭義のオタクは腐女子の61.5%（24人）を包摂するにとどまる。腐女子のうち38.5%（15人）は狭義のオタクには該当しない⁶⁾。

2. 3 GYS調査における操作的定義

GYS調査については、以下の質問項目によって「腐女子」を操作的に定義する。

「あなたがよく読むマンガのジャンルを、次の選択肢から全て選んで○をしてください」

この問題の選択肢の一つとして「やおい・BL」が提示されており、これに丸をつけた回答者が28名いる。彼らの性別を確認すると28名のうち2名が男性である。以下ではジェンダーに関わる項目を分析することになるので、ここでは男性を「腐女子」から外すことにする。このようにして抽出された「腐女子」は全回答者の5.5%、女性回答者の9.5%を占める。

なおGYS調査は杉並区と松山市で行われたものである。調査地別に見ると杉並区が18名、松山市が8名となる。ケース数が少ないので判断が難しいが、 χ^2 乗検定の結果を見ると調査地による分布の違いがあるとは言えない、という結果である。そこで以下では、腐女子の人数が少ないということもあり、両地域を合わせて分析を行う。

またオタクについても定義しておこう。青少年研調査と同様にGYS調査においても趣味を複数選択方式で

尋ねている。32個の選択肢の中から、アニメ、マンガ、ゲーム（テレビ、PCゲーム、携帯機、スマホアプリ、ゲームセンターなど）のいずれか一つに丸をつけたものを広義のオタク、それら三つのすべてに丸をつけたものを狭義のオタクとする。ゲームという選択肢の内容が青少年研調査とやや異なることに注意されたい。

広義のオタク男性の構成比は、全体の25.8%、男性の63.2%、狭義のオタクの男性の構成は、全体の9.3%、男性の22.8%となる。

それに対して広義のオタク女性の構成比は、全体の33.8%、女性の57.3%、狭義のオタク女性の構成は、全体の8.4%、女性の14.3%となる。腐女子との関係でいうと、広義のオタクは腐女子の92.3%（26人中24人）を包摂しているが、狭義のオタクは50.0%（13人）を包摂するにとどまる。

GYS調査ではさらに回答者にオタク自認の度合いを4件法で尋ねている（「自分にはオタクっぽいところがあるとおもう」）。腐女子の回答状況を見ると、26名中23名（88.5%）が、「あてはまる」「まああてはまる」と回答しているのに対して、3名が「あまりあてはまらない」と回答している。回答者全体の分布を見ると、肯定的回答（「あてはまる」+「まああてはまる」）は54.1%であり、腐女子のオタク自認度は相対的に高い。だが、ここで操作的に定義した腐女子が、趣味選択においてもオタク自認においても、オタクと完全には重なり合わない部分を持つことに注意しておこう。

以上が三つの調査データを分析する上での「腐女子」の操作的定義である。それぞれの調査における腐女子の構成比を比べてみると、北田調査に比して他の二つの調査における構成比が小さくなっている。この点にかかわって、定義の仕方の違いの含意を確認しておく。北田の定義はオタク尺度・二次創作志向・性別の組み合わせによって導出されたものであるのに対して、青少年研調査・GYS調査について先に示した定義は「やおい・BL」のマンガを読むことである。二次創作の中には小説もあればイラストも含まれる。それらを楽しむ人々は、後者の定義では「腐女子」に該当しないことになる。例えばpixivなどネット上のイラスト共有サービスを中心に作品を楽しんでいる人々は、この定義によっては数えられていない可能性が残る⁷⁾。

いずれにせよあまり多いとはいえないこれら腐女子を以下の分析対象とする。ケース数の小ささは分析の信頼性に影響することがあるという点に注意しておこう。

2. 4 腐女子の社会経済的な属性

先に定義した腐女子の社会経済的な属性について確認しておく。

北田は、注においてではあるが、「練馬区調査では、二次オタク女性≡腐女子は、学歴が高く（高卒大学在籍者が多い）、また実家の暮らし向きもよい」と報告している（北田2017：312）。本稿で用いる二つの調査データではどのようなになっているであろうか。

2. 4. 1 青少年研調査

青少年研調査では暮らし向きについて5件法で尋ねている（1. 余裕がある 2. やや余裕がある 3. ふつう 4. やや苦しい 5. 苦しい）。回答番号を反転して得点とみなした上で、腐女子かどうかを独立変数とする分散分析を行うと、腐女子／非腐女子の間に統計上有意な差は見られない。女性回答者のみを取り出して同様の分析を行ってもやはり差は見られない。

また15歳時点での家の所有物（持ち家、子供部屋、学習机、文学全集・図鑑、等々）について15個の選択肢をあげて複数回答方式で尋ねている。選択された個数を15歳時点の財産の指標とみなし、腐女子かどうかを独立変数とする分散分析を行った結果、統計上有意な差は見られない。女性回答者のみを取り出しても同様である。

本人学歴については調査対象の年齢の関係で高校在学中のものを多く含み、正確な分布を知ることができないので、両親の学歴に注目する。父親、母親の学歴をそれぞれ「1 小学校・中学校 2 高校・専門学校・各種学校 3 短大・高専・大学・大学院」というように三分割して、これを得点とみなす。先ほどと同様に腐女子／非腐女子を独立変数とする分散分析を行った結果、父学歴、母学歴ともに統計上有意な差はみられなかった。女性回答者のみを取り出しても同様である。

以上の分析をふまえると、腐女子はそれ以外の回答者（あるいはそれ以外の女性回答者）と特に異なった社会経済的属性を持つとは言えない、ということになる。

2. 4. 2 GYS調査

GYS調査では実家の暮らし向きについて4件法で尋ねている(1. 上 2. 中の上 3. 中の下 4. 下)。これを反転して得点とみなした上で腐女子かどうかを独立変数とする分散分析を行うと、腐女子の方がそれ以外の回答者よりも有意に暮らし向きが悪い。女性回答者のみを取り出して同じ分析を行っても同様の結果となる。

また本人の学歴を「0 中学校・高校・専門・各種学校 1 短大・高専・大学・大学院」と二分割した上で腐女子の分布をみると19人が「1 短大・高専・大学・大学院」、7人が「0 中学校・高校・専門・各種学校」となる(回答者はすべて20歳)。腐女子のケースが少ないためやや正確性を欠くが、 χ^2 二乗検定の結果からは有意な違いがあるとはいえない。女性回答者のみを取り出して同じ分析を行っても同様の結果となる。

両親学歴については、「1 中学校 2 高校・専門学校・各種学校 3 短大・高専・大学・大学院」と三分割して、これを得点とみなす。先ほどと同様に腐女子／非腐女子を独立変数とする分散分析を行った結果、父学歴、母学歴ともに統計上有意味な差はみられなかった。女性回答者のみを取り出しても同様である。

以上の分析をふまえると、腐女子は本人学歴・両親学歴においては特段の違いを示さないものの、暮らし向きについてはより悪い傾向が見られる。

以上、腐女子の社会経済的な状況について確認してきた。北田調査から読み取られた状況とはやや異なったものになっていること、また上の二つの調査の間にも違いが見られることに注意しておこう。

3. 腐女子は非「データベース消費」的か

以上をふまえて、まず北田の主要な知見の一つ、腐女子の作品受容における非「データベース消費」的な態度について検討していこう。

北田は次のように述べる。

「男性の二次創作好きオタク(男性二次オタクと呼ぶ)は予想通り、他の男性カテゴリーに比して非データベース消費的(表層的)な受容態度との高い親和性(自己陶冶的な受容様式)はうかがわれず、また古典マンガを読むという教養志向・難しいマンガを読むという文学的志向も有意な関連がみられない。それとは対照的に、女性二次オタクには反物語的な表層受容との有意な関連がみられず、また自己陶冶的な受容様式に親和的な傾向がみうけられる。」(北田2017: 271)

具体的にいうと、北田が抽出した腐女子(≡二次創作好きのオタク女性)は、「教養のために昔の有名な漫画を読むようにしている」、「わたしの生き方に影響を与えたマンガがある」といった質問に対して有意に肯定的な回答をする傾向があるのだという。

本稿で用いる二つの調査には比較できる同様の質問(マンガ受容についての質問)がないので、別の質問で代替した上でこの知見について検討していく。

3. 1 青少年研調査

青少年研究会調査では、趣味を複数回答方式で尋ねる際に上げられた選択肢の一つに「文学(小説など)」というものがある(以下、これを文学趣味と表記する)。また幼少時文化資本について尋ねる以下の項目を4件法で尋ねている(よくあった・ときどきあった・あまりなかった・なかった)。

- a) 子どもの頃、家族の誰かがあなたに本を読んできた
- b) 子どもの頃、家でクラシック音楽のレコードをきいたり、家族とクラシック音楽のコンサートに行った
- c) 子どもの頃、家族につれられて美術展や博物館に行った

これらの項目が腐女子であることとどのように関係しているのか(していないのか)を検討する。もし文学趣味や文化資本の保有と腐女子であることとの間に正の関連があるとしたら、北田の知見は間接的に支持され

ることになるだろう。

まず文学趣味との関係から見てみる。クロス集計の結果からわかるのは、文学趣味を持つ度合いは、腐女子において有意に高いということである。これは腐女子とそれ以外の全回答者を比較した場合にも、腐女子とそれ以外の女性回答者を比較した場合にもいえる（どちらも1%の有意水準）。他方、広義のオタク男性について同様の分析を行った結果はやや両義的である。すなわち、広義オタク男性は、それ以外の全回答者と比較した場合、文学趣味を持つ度合いに違いはない。だが、広義オタク男性以外の男性と比較した場合には、彼らが文学趣味を持つ度合いは有意に高い（5%の有意水準）。広義オタク男性もそれなりに（男性の中では）文学趣味との正のつながりをもつが、腐女子のほうがよりはっきりとその関係を示す、ということになる。

次に幼少時文化資本との関係をみてみる。幼少時文化資本を示す三つの質問への回答を従属変数とし腐女子／非腐女子を独立変数とする分散分析を行った結果、差が見いだされたのはクラシック音楽項目であった。すなわち腐女子は、それ以外の全回答者と比較した場合、有意にこの項目について肯定的に回答している。腐女子以外の女性と比較した場合には差が見られないが、有意水準を10%にとれば腐女子の肯定回答率の方が高いとみなしうる。他方、広義のオタク男性は、それ以外の全回答者と比較しても、他の男性回答者と比較しても、幼少時文化資本との正の関連は見いだせない（むしろ全回答者との比較では幼少時読書経験との負の関係が見られる）。

以上の分析をふまえて、腐女子ダミー変数（腐女子に1、それ以外に0をわりあてた変数）を従属変数とし、社会経済的な変数と文学趣味、クラシック音楽項目を投入したロジスティック回帰分析を行った（女性回答者のみ）。その結果を表1に示す。適合度検定のp値はあまり良好ではないので、その点に注意が必要だが、文学趣味の正の効果が確認される（10%水準ではあるがクラシック音楽も）。

表1 腐女子／非腐女子を従属変数とするロジスティック回帰分析
(青少年研調査：女性回答者のみ)

独立変数	偏回帰係数
年齢	0.030
暮らし向き	-0.039
15歳時資産	-0.151
母学歴	-0.291
文学趣味	2.044 ^{***}
クラシック音楽資本	0.391 ⁺
Hosmer-Lemeshowの適合度検定	0.040
Nagelkerkeの疑似決定係数	0.208

*** p<.001 + p<.1

3. 2 GYS調査

GYS調査においても複数回答方式で趣味を尋ねており、選択肢の一つとして「小説・文学・哲学の読書」を提示している（以下これを読書趣味と表記する）。これが腐女子であることとどのように関係しているのか（していないのか）を検討する。

腐女子とそれ以外とで読書趣味の選択状況がどのように違うのかをクロス集計によって確認してみると、腐女子はそれ以外の全回答者に比較して読書趣味を選択する度合いが有意に高いことが確認される。腐女子とそれ以外の女性回答者を比較すると差が見られないものの、有意水準を10%にとれば腐女子の肯定回答率の方が高いとみなしうる。他方、広義のオタク男性が読書趣味を選択する度合いは、他の全回答者と比較しても、他の男性回答者と比較しても差が見られない。

以上の分析をふまえて、前節と同様に腐女子ダミー変数を従属変数とし、社会経済的な変数と読書趣味を投入したロジスティック回帰分析を行った（女性回答者のみ）。その結果を表2に示す。

表2 腐女子／非腐女子を従属変数とするロジスティック回帰分析
(GYS調査：女性回答者のみ)

独立変数	偏回帰係数
暮らし向き	-0.920**
本人学歴	-0.137
母学歴	0.695
読書趣味	0.910*
Hosmer-Lemeshow の適合度検定	0.330
Nagelkerke の疑似決定係数	0.125

** p<.01 * p<.05

読書趣味の正の効果が確認される。また2.4で確認した暮らし向きとの負の関係がここでも再確認された。

以上から、腐女子であることは文学趣味や読書趣味と正の関連があることが確認された。もちろんこれらの趣味を持つからといって、やおい・BL作品（マンガ）をも文学や哲学のように読むとは必ずしも言えないが、一定の傍証にはなりえるだろう。その限りにおいて北田の知見は、上記の分析によって間接的に支持されたといえることができる。

4. 腐女子は反性別規範的か

次に北田のもう一つの知見、腐女子の戦後家族的な性別役割規範に対する懐疑的な態度について検討する。北田は次のように述べる。

『腐女子』は、戦後家族的な性別役割規範に対してきわめて否定的な立場をとっており、一方で『男性オタク』は、もっとも家族の戦後体制に適合的なジェンダー規範を持っている。」（北田 2017：293）

具体的には「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよいと思う」「わたしは結婚したら、子どもを持ちたいと思う」など6つの質問⁸⁾に対する肯定度を標準得点化し、二次オタク女性（≡腐女子）を含めて、類型ごとに比較し、腐女子と男性二次オタクとの間に最も対照的といえるよい差異を見出している（北田 2017：291）。

本稿で用いる二つの調査でも性別役割に関する規範意識について尋ねているので、北田が見出したこの性別役割規範への懐疑的な態度がそこでも見いだされるのか、検討していく。

4. 1 青少年研調査

青少年研調査でも性別役割規範に関する質問をいくつか尋ねており、ここではその中から二つの項目に注目する。ひとつは、古典的ともいえる以下の質問（4件法）である。

「結婚後、妻は外で仕事をせず、家事や育児に専念すべきだ」

この質問に対する肯定度を分析対象とする。いわば性別役割分業に関する保守的な意識の測度である。もうひとつは、恋愛至上主義とでもいうべき態度の強さに関する以下の質問（4件法）である。

「恋愛は、なにごとにも替えがたいことだ」

この質問についてもその肯定度を分析対象とする。

後者の質問に注目する理由を説明しておこう。

北田によれば、先に上げた6つの質問のうち腐女子と男性二次オタクとの間で最も大きな違いが見られるの

は、自分自身の出産に関わる項目（「わたしは結婚したら、子どもを持ちたいと思う」）である。この質問への否定的回答は、北田の考えでは、「性行為をとまなう出産という自己身体に強くかかわる事柄について、『結婚すること、産むことを期待する制度』に意思決定を委ねること」（北田2017：301）に対する批判的態度の表れである。強制的異性愛の色彩をとまないつつ「恋愛至上主義」はこのような「制度」の一端をなす⁹⁾。青少年研調査でもGYS調査でも結婚・出産についての質問はないのだが、恋愛至上主義の質問に注目することで大きな方向性としては同じ問題に向き合うことができる。

ひとつめの質問項目から見ていこう。性別役割分業への肯定度を従属変数、腐女子ダミー変数を独立変数とする分散分析を行う。その結果、腐女子の肯定度は有意に低いことがわかる。これは、他の全回答者に対しても、他の女性回答者に対してもいえる。他方で、広義のオタク男性は、逆に、他のすべての回答者と比較して性別役割分業への肯定度が有意に高い（有意水準1%）。ただし他の男性回答者と比較すると有意な差がみられないので、オタクの肯定度が高いというよりも、男性の肯定度が高いというべきかもしれない。

これをふまえて肯定度を従属変数、社会経済的変数と腐女子ダミー変数を独立変数とする重回帰分析を行った。結果を表3に示す。

表3 「結婚後、妻は外で仕事をせず、家事や育児に専念すべきだ」への肯定度を従属変数とする重回帰分析
(青少年研調査：女性回答者のみ)

独立変数	偏回帰係数
年齢	0.03261 **
暮らし向き	0.01229
15歳時資産	-0.0732 *
母学歴	0.01788
腐女子ダミー	-0.35041 **
調整済みR二乗値	0.04499 **

** p<.01 * p<.05

決定係数（調整済みR二乗値）が小さいことに注意が必要だが、腐女子ダミーの負の効果は確認できるだろう。他に、年齢が正の効果をもつ、15歳時資産が負の効果をもっていることも見て取られる。

次に恋愛至上主義について検討しよう。先程と同様に恋愛至上主義への肯定度を従属変数、腐女子ダミー変数を独立変数とする分散分析を行う。その結果、腐女子の肯定度は有意に低いことがわかる。これは、他の全回答者に対しても、他の女性回答者に対してもいえる。他方で、広義のオタク男性は他のすべての回答者との比較において有意な差がみられない。ただし他の男性回答者との比較において広義オタク男性の肯定度は10%の有意水準においてはあがあるが有意に低い。この限りにおいて腐女子と広義オタク男性の間で、恋愛至上主義への懐疑はわずかながら共有されているとみることができるのかもしれない。

これをふまえて肯定度を従属変数、社会経済的変数と腐女子ダミー変数を独立変数とする重回帰分析を行った（女性回答者のみ）。結果を表4に示す。

表4 「恋愛は、なにごとにも替えがたいことだ」への肯定度を従属変数とする重回帰分析
(青少年研調査：女性回答者のみ)

独立変数	偏回帰係数
年齢	0.003
暮らし向き	0.001
15歳時資産	0.006
母学歴	-0.012
腐女子ダミー	-0.567 ***
調整済みR二乗値	0.038 **

*** p<.001 ** p<.01

ここでも決定係数（調整済みR二乗値）が小さいことに注意が必要だが、腐女子ダミーの負の効果は確認できる。

4. 2 GYS調査

GYS調査でも性別規範についていくつか質問をしているが、ここでは2つのものに注目する。一つは女性の就業継続にかかわるものだ。すなわち、女性が職業を持つことについてどう考えるか、以下の選択肢から選んでもらうという質問である。

1. 結婚するまでは職業をもつ方がよい
2. 子どもができるまでは、職業をもつ方がよい
3. 子どもができて、ずっと職業を続ける方がよい
4. 子どもができたら職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつ方がよい

そこで3を選んだかどうかを判別する就業継続ダミー変数（3を選んだ場合に1を、それ以外の場合に0を割り振る変数）を作成し、これを対象として分析を行う。

もうひとつは恋愛至上主義に関する以下の質問である。

「恋愛は、なにごとにも替えがたいことだ」

これに対する肯定度を分析対象とする。

まず女性の就業継続に関する質問から見ていこう。就業継続ダミー変数と腐女子ダミー変数とのクロス集計を行い、両者の関係を確認した。結果は、腐女子とそれ以外の全回答者、腐女子とそれ以外の女性回答者、いずれの場合にも有意な差は見いだされなかった。上記選択肢の3、4をあわせたものを広義の就業継続とみなし、これについても同様の分析を行ったが結果は同じであった。広義男性オタクについても同様で、それ以外の全回答者に対して、それ以外の男性回答者に対して有意な差は確認できなかった。

これをふまえて就業継続ダミー変数を従属変数、社会経済的変数と腐女子ダミー変数を独立変数とするロジスティック回帰分析を行ったが、腐女子であることの効果はみられなかった（結果表は省略）。

先の青少年研調査とはある意味で対照的に、就業継続については腐女子であることは肯定的にも否定的にも関連しないということになる。

次に恋愛至上主義との関わりについて検討する。前節と同様に恋愛至上主義への肯定度を従属変数、腐女子ダミー変数を独立変数とする分散分析を行う。その結果、腐女子の肯定度は有意に低いことが確認された。これは他の全回答者と比較しても、他の女性回答者と比較しても同様である。他方、広義オタク男性の肯定度は、他の回答者、他の男性いずれに対しても有意な差を示さなかった。

これをふまえて肯定度を従属変数、社会経済的変数と腐女子ダミー変数を独立変数とする重回帰分析を行った（女性回答者のみ）。結果を表5に示す。

表5 「『恋愛』は何ごとにも替えがたいことだと思う」への肯定度を従属変数とする重回帰分析
(GYS調査：女性回答者のみ)

独立変数	偏回帰係数
暮らし向き	0.05908
本人学歴	-0.08149
母学歴	-0.04584
腐女子ダミー	-0.57227**
調整済みR二乗値	0.0299*

** p<.01 * p<.05

これについても決定係数（調整済みR二乗値）が小さいことに注意を要するが、腐女子ダミーの負の効果を確認できる。

以上から就業継続については腐女子であることの効果を確認できなかったが、恋愛至上主義への消極的な態度は確認できた。後者については青少年研調査の結果とも一致しており、それなりに堅固な結果であるといつてよいように思われる。

とはいえ最後に注意を促しておきたいのは、だからといって腐女子が恋愛をすることそれ自体に消極的であるとはいえないということだ。青少年研調査でもGYS調査でも恋愛経験の有無をたずねているのだが、腐女子は他の女性と比べて恋愛（交際）経験が少ないわけではない。正確に言えば、青少年研調査ではむしろ腐女子の方が他の女性と比べて恋愛（交際）経験ありとするものが有意に多く、GYSでは両者に有意な差が見られない。いずれにせよ恋愛至上主義に対して否定的だからといって恋愛それ自体を抑制しているとはいえないのである。

結論

以上、二つの調査データ（腐女子のケース数が小さいものであるが）を用いて北田の議論（の一部）を検討してきた。確認されたのは以下のことである。

第一に、腐女子の作品受容における態度がデータベース消費的ではなく、むしろ教養主義的、人格陶冶的であるという点について。二つの調査データが共通に示しているのは、腐女子であることと趣味としての読書との間に何らかの正の関係があることだ。また青少年研調査は、幼少時文化資本の一部との関連についても示唆している。間接的なものではあるがこの結果は北田の知見を支持するものである。

第二に、腐女子が性別規範について批判的であるという点について。性別役割分業については二つの調査は異なった結果を示した。すなわち青少年研調査では腐女子であることと性別役割分業への否定的な態度との間に何らかの正の関連があることが示されたが、GYS調査ではそのような関係はみられない（質問文の文言が異なるため厳密に言えば背反する結果とまでは言えないが）。他方、恋愛至上主義については、二つの調査データのいずれもが腐女子の消極的態度を示している。この結果は北田の知見の一部を支持するものである。

第三に、性別役割分業規範についての分析がそうであったように、いくつかの点で北田調査と他の二つの調査との間に、あるいは二つの調査相互の間に違いが見られた（腐女子の社会的な属性、恋愛至上主義における男性オタクと腐女子との差異など）。

したがって北田の知見の骨格はおおむね支持されたが、さらに調査を重ねて明らかにすべき点も残る、ということになるだろう。今後のさらなる調査研究を期したい。

注

- 1) 北田の論文には賛否両論が寄せられたが、その一部に対する北田自身の応答をネット上で見ることができる（北田 2019）。以下のURLを参照されたい（2020年8月19日取得）：<https://note.com/gyodaikitada/n/nf3ec68635b4e>。
- 2) ただし東浩紀は、女性のオタクが動物化と別の論理にしたがって楽しんでいる可能性に対して自覚的である。例えば彼は以下のように明言している。
「とはいえ筆者はここで、やおいものを中心に消費している女性のオタクたちについては留保をつけておきたい。筆者の数少ない経験から言うと、すっかり動物化してしまったギャルゲーの消費者と比較して、やおいものを愛好する女性のオタクたちの創作動機や消費行動ははるかに人間的で、セクシュアリティの問題と密接に関係するよう見えることも多いからである。」
「他方で、商業ベースでの動きを見るかぎり、その女性たちですら、若い世代では動物化しデータベース化しつつあるようにも思われる。そこらへんの正確な事情は、残念ながら、調査不足で筆者にはよく分からない。」（東 [2001: 184]）
- 3) このデータをもとにした書籍が近日中に刊行予定である（木村・饒田・牧野編 近刊）。
- 4) このデータをもとにした書籍が近日中に刊行予定である（松田・辻・浅野編 近刊）。
- 5) ここで言うような「操作的定義」も含めて、あるカテゴリー（この場合には「腐女子」）の使用は、何らかの営み（「操作

- 的定義]であれば量的データによる分析という営為)を組織するための一手として行われる。したがってあるカテゴリーが対象と正確に対応しているか(その「定義」は実態を正確に反映しているか)という問いは、そのカテゴリーの使用がどのような営みを組織するもの(「手」)であるのかという問いによって補足されない限りしばしば的を逸したもの(あえていえば「擬似問題」となる。北田らの共同研究においてこの視点を明確にとっているのは岡澤と團の二人である(岡澤・團 2017; 團 2017)。
- 6) これは主にオタクの定義に「ゲーム」が含まれていることによる。腐女子のうち15人はゲームに丸をつけていない。アニメ・マンガのみで狭義のオタクを定義すれば腐女子はそこにほぼ包摂される。
 - 7) なお青少年研調査では複数回答方式で「よく読むマンガの種類」を尋ねており、その中に「マンガ同人誌」という選択肢が提示されている。この選択肢の回答状況と腐女子であるかどうかとをクロスさせると、腐女子の66.7% (26)が「マンガ同人誌」をよく読んでいるということがわかる。また同調査での「ネットの画像サイト(pixivやニコニコ静画など)をよく利用する」(4件法)という質問に対して、腐女子の66.7% (26人)が肯定的に回答しており(腐女子以外、あるいは腐女子以外の女性と比較して有意に多い)、ネットと腐女子の親和性がうかがわれる。
 - 8) 6つの質問は以下のものである(北田 2017: 291)。「男性も家事や炊事をしたほうがよいと思う」「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよいと思う」「もし夫に十分な収入があるとしたら、妻は仕事をもたないほうがよいと思う」「わたしは結婚したら、子どもを持ちたいと思う」「結婚したら、みんなが子どもを持ったほうがよい」「男の子と女の子は違った育て方をすべきであるとわたしは思う」。
 - 9) 北田がその論文において大きく依拠している東園子は、宝塚やおおいにおけるオーディエンスの楽しみ方を相関図消費として取り出してみせた。そしてそのような楽しみ方が1970年代に登場してきた背景を、強制的異性愛との関係で理解している。すなわち、
「宝塚やおおい、異性との恋愛の義務化という強制的異性愛によって女性たちから奪われたホモソーシャルな親密性という夢を女性たちに見せる一面をもっている。そして、両者の愛好は、時に女性たちが実際にホモソーシャルな絆を結ぶ機会をも開いている。」(東 2015: 283)

文献

- 浅野智彦, 2019, 「『オタク』は孤独か」, 友枝敏雄・山田真茂留・平野孝典編, 『社会学で描く現代社会のスケッチ』, pp.63-71, 株式会社みらい, 岐阜県
- 東浩紀, 2001, 『動物化するポストモダン』, 講談社, 東京都
- 東園子, 2015, 『宝塚・やおい, 愛の読み替え』, 新曜社, 東京都
- Bennett, T. et al., 2010, *Culture, Class, Distinction*, London: Routledge (磯直樹他, 2017, 『分化・階級・卓越化』青弓社)
- 團康晃, 2017, 「『おたく』の概念分析」, 北田暁大+解体研『社会にとって趣味とは何か』, pp.231-260, 河出書房新社, 東京都
- 堀あきこ・守如子編, 2020, 『BLの教科書』, 有斐閣, 東京都
- 神野由紀・辻泉・飯田豊編, 2019, 『趣味とジェンダー』, 青弓社, 東京都
- 片岡栄美, 2018, 「大学生の自己アイデンティティと象徴的境界の基準」, 『駒沢社会学研究』51号, pp.1-43
- , 2019a, 『趣味の社会学』, 青弓社, 東京都
- , 2019b, 「象徴権力としてのスポーツと『体育会系』アイデンティティの特徴」, 『スポーツとジェンダー研究』17巻, pp.49-63
- 木村絵里子・轡田竜蔵・牧野智和編, 近刊, 『場所から問う若者文化 ポストアーバン化時代の若者論』, 晃洋書房, 東京都
- 北田暁大, 2017, 「動物たちの楽園と妄想の共同体」, 北田暁大+解体研『社会にとって趣味とは何か』, pp.261-313, 河出書房新社, 東京都
- 北田暁大+解体研編, 2017, 『社会にとって趣味とは何か』, 河出書房新社, 東京都
- 松田美佐・辻泉・浅野智彦編, 近刊, 『グローバル化する若者世界』, 岩波書店, 東京都
- 宮台真司, 1993→2007, 『増補 サブカルチャー神話解体』, 筑摩書房, 東京都
- 溝口彰子, 2015, 『BL進化論』(Kindle版), 太田出版, 東京都
- 大塚英志, 2012, 『物語消費論改』, アスキー出版, 東京都
- 岡澤康浩・團康晃, 2017, 「読者たちの『ディスタクシオン』」, 北田暁大+解体研『社会にとって趣味とは何か』, pp.131-158,

河出書房新社, 東京都

辻泉・大倉韻・野村勇人, 2017, 「若者文化は25年間でどう変わったか」『中央大学文学部紀要』27, pp.107-137